



島田さま

七月十四日

「ご返信ありがとうございます。そうですね、ディケードで区切ると言うのは、確かに編集的な考え方と言えそうですね。実際には、昨日と今日、昨年と今年は連続したものであり、ある期間で区切る比較が意味を持つのは時間が連続しているからこそという気がします。九〇年代は八〇年代までの全てによって用意されたものだし、二〇二一年の現在は今までの結果としてあります。」

責任という言葉をも『広辞苑』でひくと「人が引き受けてなすべき任務」と出てきますが、責任には、負うことはできません、とすることは現実的には不可能なものもあるように思えます。戦争における責任など人の生死に関わるものがそうです。島田さんがおっしゃっている、九〇年代の重さというのも個人では引き受けられないものですし、個人に負わせるものでもないと思えます。時代を象徴するような人物という存在はあるでしょうが、象徴的な存在が責任を負っているわけではないと思います。もちろん、だからといって責任について流していいということにはならないので、責任

をとることや責任を問うことがどういったことかは考え続けなければなりません。

前回引用した「その時代に関しては自分たちに責任があると心から信じている」というスカの演奏家たちのあり方ですが、その責任について、いま読んでいる本『責任』の生成—中動態と当事者研究』（新曜社）に出てくる捉え方が、自分がイメージしていたものに近いものです。

責任（レスポンスビリティ）は応答（レスポンス）と結びついている。応答とはなんだろうか。それは返事をする事だが、返事をするといっても応答において大切なのは、その人が、自分に向けられた行為や自分が向かい合った出来事に、自分なりの仕方方で応ずることである。自分なりの仕方であるということが大切であって、決まり切った自動的な返事しかできていないのならば、その返事は応答ではなくて反応になってしまう。

これはまえがきの國分功一郎さんの言葉ですが、こういった言葉に出会うと、私はすぐに現在の為政者の

面々が頭に浮かんできます。問いかけに答えられない、取り合わない態度がすぐさま呼び起こされるからです。政治家の全員がそうではないということは当然ですから、政治家がという気はありませんが、しかし、質問を無視したり、黒く塗り潰された文書を出してくるといふようなことが、目立つし、余りにも多いと感ぜられるし、そういった態度を為政者たちはまるで政治におけるテクニックだとも考えていさうで、非常に不安になります。不安なのは、未来に対して以上に、彼らのセンスに対してです。あれは、応答する気はないという意思表示であり、つまり、引用した言葉に照らせば責任を引き受ける気もないということなのでしょう。

私は、仕事も遅く、だらしない人間ですが、本屋で働いていて、本屋で働くことの責任というものを考えます。本屋でというところがあるので、現在の職場である増田書店のような本屋で働く責任とするべきでしょうか。店の規模によって責任は変わってくるはずですから。

私が増田書店で働いているのはただ運があったというだけのことですが、今のような規模の職場というの